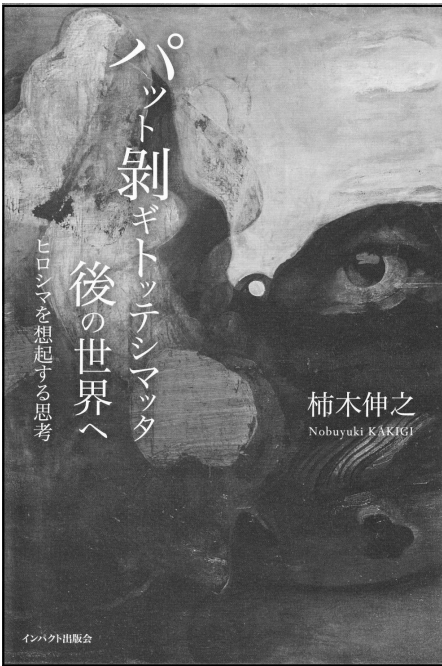


柿木伸之著 『ハット剥ギトツテシマッタ後の世界へ』——ヒロシマを想起する思考

高橋 由貴



1

本書は、他者との共生（しかもこの「他者」には死者も加わる）を課題とする柿木伸之氏の「ヒロシマを想起する回路を探ろうとする思考の試み」（4頁）としての一冊である。柿木氏は既に二〇一〇年に『共生を哲学する——他者と共に生きるために』（ひろしま女性学研究所）を著し、また二〇一四年に『ベンヤミンの言語哲学——翻訳としての言語、想起からの歴史』（平凡社）を上梓している。この二冊でも既に示されていた「ヒロシマを想起する」というモチーフ（266頁）を、今回さらにベンヤミンの言語哲学へ接続させてアクチュアルに考え直そうという企てである。本書にはこの一〇年間に広島から精力的に発信しつづけた平和に関する論考（書評と講演録を含む）が一八本収録されている。本書は四部構成を採る。第一部が「芸術の可能性」を介して「ヒロシマ」の記憶の想起の場を問う論考、第二部が「映画から問う

平和と文化」とする企画コンセプトに連なる思考、第三部が広島をめぐる本に向けられた「ヒロシマ批評草稿」と題される書評群、第四部が広島の記事の分有や継承をめぐる論考、そして巻末には実現しなかった「被爆七十集年記念事業案」が「附録」として添えられている。

タイトルは、原民喜『原爆小景』詩篇に収められた詩の一節に基づく。この詩が引用される小説「夏の花」では、被災後の広島「印象」を「どうも片仮名で描きなぐる方が応はしい」と、原子爆弾の一撃によつて一瞬にして焦土と化した眼前の光景を「パット剥ギトツテシマツタ アトノセカイ」と記されていた。未曾有の暴力を一言に凝縮させたこの表現を傍らに響かせながら、本書はカタカナ「ヒロシマ」をどのように想起すればよいかと考えていく。

では、はたして著者は、前著から引き続き、「常識の誘惑」を退けて「他者との共生との場」へとどのように辿り着こうとしているのだろうか。

2

柿木氏が提起する「ヒロシマ」の「想起」の仕方を強引に一言でまとめてしまえば「二重に剥ぎ取ること」である。原爆によつて「パット剥ギト」られた世界と化した広島。その街を覆う「勇ましく飾り立てられた言葉の喧騒」（50頁）を剥ぎ取り、その下の「他者の声」に、「その沈黙にさえ耳を澄ます」（48頁）こと、この行為は「言語そのものを見つめ直す」ことであると切実に訴

えられる。

具体的には、国家主導による繁栄を喜ぶ「軍都広島」のあり方を引き合いにし、「体制翼賛型少数者」の「大勢順応主義的心性」が戦前と同様にいまもなお「唯一の被爆国神話」を拠り所としながら広島を平和利用するという欺瞞が指摘される。

「体制翼賛型少数者」と呼ぶべき人びとの大勢順応主義的の心性は、原子爆弾によつて「軍都」が壊滅した後も存続しているにちがいない。そのことは例えば、国際的な会議やスポーツの祭典、あるいは博覧会が、「平和」のためと称して繰り返し誘致ないし招致されていることに、如実に表れている。こうした広島の外に開催主体のある大規模な催しに乗じて「国際平和都市」広島を世界にアピールしようと企み、その機会に現在のアメリカ合衆国大統領を含むノーベル平和受賞者のような国際的な「権威」が「平和」を代弁してくれることを期待する心性は、その志向性において、「軍都」を支えた心性とまさに同型である。物理的な「軍都」は滅んでも、軍都根性は戦後の「国際平和文化都市」の仮面の下に生き残っている。（12頁）

このように外からの旗指物に集う「平和」の政治利用が厳しく指弾される。営利と結びついた運動や祭典の常識的な仮面を、「平和公園の白いコンクリートを剥がす」ように剥がさなければならぬ。その時、死者追悼をめぐる哲学が必要不可欠であるのだ。そして本書は広島の内側から、「芸術の可能性」を介して「ヒロ

シマ」を見つめ直し、想起させていく。

芸術の力を発揮させることによつて、広島市の街に今も漂う鎮まることない魂たちが集う場を、死者を忘却しながら破局を繰り返してきた歴史の流れを中断させて今ここに切り開き、爆心地という世界の崩壊のグラウンド・ゼロで、死者とともに生きられる世界を再構想する出発点に立つこと。これが被爆から七十年の都市に、広島市の地で表現に携わる者に課せられていることではないかと考えている。(70頁)

本書が扱う対象は、芸術の概念から、短歌(『原爆遺跡を詠む』など)、映像・映画(「ヒロシマ平和映画祭」やその中で上映された『Marines Go Home 2008——辺野古、梅香里、矢白別』『やんばるからのメッセージ』『アメリカ——戦争する国の人びと』など)、広島をめぐる著作やマンガ(『はだしのゲン』など)や音楽(所謂「佐村河内事件」など)、さらにヘイト・スピーチまで幅広く。これらの芸術作品自体と、芸術をめぐる事件や現象とが吟味されながら言及されていく。

巻末の、不採択となった「被爆七十周年記念事業案」は、その端的な実践であるだろう。「被爆から七十年という節目」に、「非体験者が主体となつて、ヒロシマの被爆の記憶を、世界中の苦難の記憶と呼応させながら発信し続ける」ために、「被爆地ならではの文化の世界的な発信の拠点となる芸術文化施設の整備と上演作品の委託」という事業を提案する。「資料の保全」を目的とした「文学館」の建設と整備、「音楽と舞台芸術の専門的な複合施

設」の建設と、そこで上演される現代オペラ委託が願ひ求められたい。

ベンヤミンの「歴史」の「逆撫で」という言葉は、支配者側が残す物ではなく、見棄てられた対象をすくいだし、従来の固定化された歴史や価値を引き剥がして新たな(歴史)を作り直す行為を示していた。戦前戦中の「軍都広島」の記憶と併せて現在の広島のある方を想起させることで「唯一被爆国神話」として広島を消費することに抗する発言などは、まさにこのようなベンヤミンに依拠した哲学実践であつただろう。

3

さて、ここで考え込んでしまうのは、被爆地「ヒロシマ」をめぐる「平和利用」と、広島市で行われる芸術や文学をめぐる市民参画のイベントとを線引きするものは何だろうか、ということである。

例えば東日本大震災の被災跡地に官民あるいは産学連携で計画された公園設計の際に参考とされたのが、沖縄と広島市の平和公園であつたという、まったくもつて笑えない冗談のような話がある。悲劇的な出来事は、いつのまにか起源が忘却され、その生々しさや禍々しさが脱色され、あるいは都合よく切り縮められ、そうして安易に「利用」されていく。死者追悼をめぐる哲学の不在はよく耳にする。死者を含めた形でその根底を厳しく問う柿木氏のよいうな哲学が今後ますます不可欠なのは間違いない。個別の出来事を前に、その都度検討し、私たちは、外から届く一見心地よく耳

に響く言葉から、身を切られるように自分たちを引き剥がしにからなければならぬ。

ただし、本書に対する評者のいささかのひっかかりは、「どもる」ことや「沈黙」(58頁)の意義を論じる柿木氏の、しかしその書きぶりの淀みなさである。平和において考えあぐねるべきところに、流れが遮断されない明晰な記述スタイルが発揮される。

このもどかしさをどうしたらよいだろう。たちどまらせ、詰まらせる思考。本書の、柿木氏の持ち味である美しく淀みない叙述のスタイルは、整えられていない「文化財」をすくいあげるペンヤミンの「逆撫で」の手つきとはどうも折り合わないような気もする。短歌・映画・文学・音楽……既存の枠組で十分に評価されてきた芸術だけでなく、それにとらわれない新たな対象との格闘も期待してしまうのは、評者の欲張りというものだろうか。

原民喜は、被災体験を語る営みを、(のつべらぼう)の怪談に喩えていた。原爆の閃光に灼かれた死者たち、かろうじて生き延びた原が死者のことを語ろうとする時、被爆の現実を知らない者たちの顔が話そうという言葉を発する原の前で(のつべらぼう)に変わるのである。怪談と同じく、顔のない死者と、他者として壁のように立ちはだかる(のつべらぼう)に挟み撃ちされる原の戦慄はとてしもない。死者たちの呻吟する見えない「断末魔のカミツク声」(63頁)に、生者である私たちはどのような容貌で応えるべきであるだろうか。少なくとも、いつもの顔を一旦捨て、私たちを安逸たらしめているその皮を一枚引き剥がしながら向き合う覚悟がなくなるとはならない。「剥ぎとられた世界の人間」と共にあるとはどういうことなのか。その点において、柿

木氏の言う死者も含めた「他者との共生」という次元はどこに設定されるのかをさらに問いたい。

4

表紙の装丁には鬚光「眼のある風景」が施されている。もともとライオンのスケッチから構想されたというこの絵は、動物の原型をなくし、存在する得体の知れない塊にまで高められた眼だけを底気味悪く描く。その眼の強さに息をのむ。本書の「剥ぎト」るモティーフは、表紙にも一貫しているのだ。原民喜も、現実を突き抜けて表現する際にシュルレアリズムの有効性に言及していた。ペンヤミンもまたシュルレアリズムに並々ならぬ関心を寄せていた。既存の常識を退け、その向こうにある不気味で耐えがたい(何か)を凝視し、耳をかたむけ続ける柿木氏の傾向は、表紙から「あとがき」までぶれるところがない。

戦後から七一年も隔たった時間と場所に足を踏み入れた私たちは、過去が歴史となり、ますます原爆投下の記憶と証言から遠ざけられ続けている。柿木氏も、そして本書を手取る読者も、表紙に装丁された鬚光の眼、だけの不気味な存在に見つめられ続けられることに今後さらに長く耐えていかねばならないことだけは自明であるはずである。

(二〇一五年七月二五日 インパクト出版会 二七〇頁 二一〇〇円+税)